

病院なる人々

By 風っ子

第6話 介護の女(ひと)

「おばあちゃん、ダメよ。食べるときはちゃんと目を開いてね！」

半分眠ったような顔をして、まるで茶碗に顔をつけるようにして食べている松村トミに向かって、嫁の道子がしかった。

この部屋の住人はみんな、半分眠りながら食事をしている。それぞれの介護の家族は、眠りながら食べる病人にどうやったら少しでも多く食べさせることができるかに最大の労力を使う。

となりの老婆などは、肉団子が入ったお皿に顔をくっつけて、もはや軽いイビキなどかいている。

世話好きの道子が

「おばあちゃん、ほら、おきて一、そんなとこでねたらダメよー！」

といいながら、となりの老婆を抱きかかえて起こす。老婆の顔に肉団子が二つついていた。

「おばあちゃん、顔で食べてどうすんの一、口で食べるんですよ」

などといいながら笑っている。



道子はもうかれこれ四ヶ月近く、この姑の介護をしている。くも膜下出血で入院、手術をしたのがお彼岸の前だった。今はもう、そろそろ梅雨が明けそうである。

毎日、朝の後片付けや掃除が終わると病院に出勤(?)する。そのまま晩の7時近くまで病院にいる。幸い夫の正雄は、役所のさほど忙しくない部署なので、定時にはもどってくる。帰りに買い物を済ませ、晩御飯の用意をしてくれる。道子が家に戻る頃には、ちゃんと夕飯ができています。大学と高校の二人の子どもたちも、早く帰ってきて夫の手伝いなどをしてくれる。

正雄は、道子にかなり気を遣い、夕飯は道子の好きなものをできるだけ作るようにしている。初めは、炊事などまったくできなかつたのだが、四ヶ月も経つと、大分上手になり、レパートリーもずいぶん増えてきた。

「内緒だけどね、お母さんのよりずっとおいしいよ」

などと、子どもたちも言う。

今朝もいつものように病院に出勤してきた道子は、病室で異様な光景を見た。トミがベッドの上にポータブルトイレを置いて、その上で雑誌を逆さまに見ているのである。

「あばあちゃん、何してんのよー！」

啞然とした道子は、やっと気を取り直し、トミをベッドに寝かせ、トイレを片付けた。

「どうしてあんなことをしてたの？」

少し冷静になって道子が聞いた。

「あたしゃーね、このままでは頭がボケると思ってね、少し、勉強しようとおもった

んだよ。でもね、字がちっとも読めなくなってしまうてね。何て書いてあるかちっともわからないんだよ、困ったもんだねー」

「逆さまに読んでいたら、そりゃーわかりにくいわよ。それにしても、何もトイレの上で読まなくてもいいでしょうに…」



トミの不可解な行動はそれからも時々続いた。夜中にナースコールで、看護師を23回も呼んだり、それも、息子を呼んでくれとか、ベッドの上に座っているのに、ベッドに座らせてくれといたりして看護師を困らせた。

ある時など、道子が病室の隣のロビーで雑誌を読んでいたら、前の廊下を、病人用の車付きのベッド用テーブルを歩行器がわりにしてフラフラと歩いているトミを見て、めまいがして倒れそうになった。

次の朝は、ベッドの横に置いてあるポータブルトイレに座りーそうロダンの考える人のようなポーズで一ぼんやり向かいのベッドを見ていた。

「おばあちゃん、トイレしてんの？よかったね、しばらく便秘が続いていたからね」しかし、よくよく見ると、下着もパジャマもそのままだ。

トミは、真面目な顔で

「考えてんの…」

と、ぽつんと言った。

道子はまたまた卒倒しそうになった。



こんなことも、あんなこともあった。

「おばあちゃん、ごめんね長いこと一人にして」

道子が外出から帰って病室に入るやいなや、トミが、ベッドに逆さまになって寝ている、しかも頭をベッドからはみ出して白目までむいて。

「お・お・おばあちゃん！どうしたのー！死んじゃーいやよー！」

驚いて駆け寄る道子に、トミは

「道子さんおかえり」

と言って、むくっと起き上がり、元通りにきちんと横になった。

それから、

道子が、下の売店に買い物に行って、エレベーターで上がってくると、

「じいちゃん、精が出るなー、もうすぐ退院かい！」

という声を聞いた。

ドキッとして声の方を見ると、何と、トミがモップをもって、フラフラと転びそうになりながら廊下を掃除しているではないか。

道子は、今度は本当に倒れてしまった。

トミが入院する前は3Lサイズだった。今はガリガリである。おまけに、手術の時に髪を切ったので、まるでじいちゃんのようなのである。病室の介護人や看護師は道子のいない所では『じいちゃん・ばあちゃん』と呼んでいる。

絶対安静ではないが、横のポータブルトイレでトイレをする時以外は、ベッドで安静の身なのである。

「もう！おばあちゃん！いいかげんにしてよね！！もう知りませんからね」

通りかかった看護師に抱き起こされて病室にもどった道子が、何とか気を取り直して、トミに説教した。
トミはそ知らぬ顔をして、横を向いている。と、突然
「道子さん、うんこ！」
道子はイスからひっくり返った。



道子は思った。
『あんなに聡明で、物静かで上品なおばあちゃんだったのに…』
人間には二面性があるというが、あんな面があったとは。道子はため息をついた。でも、同時に何だかホッとしたのも事実である。
近所の人
『おばあちゃんは上品なのに、嫁はがさつねー』
などと陰口を言ってるのを、道子は知っている。それが、姑にもあんな面があったことを知って安心し、何だか今まで以上に親しみを感じた。

『あと、2、3ヶ月がんばるか』

ベッドに寝ていたトミが、ひとつ、大きなクシャミをした。